

7 Chin cap による逆被蓋の改善について

○屋敷 徹, 清水 久喜, 塩野 幸一,
小椋 正

鹿大・歯・小児歯

当科で咬合誘導管理を受けている患者の半数は反対咬合であり, その多くに対して Chin cap を用いた治療を行っている。演者らは, Chin cap を用いた治療の経過と症状の変化について頭部 X 線規格写真計測により検討したので報告する。

対象者は Chin cap 単独使用により被蓋改善した患者とし, Lingual arch 等他の装置を併用して被蓋改善した患者は除外した。Chin cap 装着直前と被蓋改善直後の 2 枚の頭部 X 線規格写真について計測し, その変化を検討した。

各計測値を比較検討したところ, 被蓋改善直後の計測値は, Chin cap 装着直前に比べて Facial angle, A-B plane angle が減少し, Y-axis angle, Ramus inclination, Convexity が増加する傾向がみられた。この計測値の変化より, 被蓋改善がいわゆる "下顎骨の Clockwise rotation" を伴う傾向があることを示していると考えられる。また Gonial angle は, 減少する傾向がみられた。以上の他, 被蓋改善に伴う咬合変化について検討したので報告する。

8 当院における初診患児の実態調査について

○品川 光春, 品川知通子

しながわ小児歯科医院・佐世保市

当院は昭和59年6月に開院して、現在6年経過した。今回、当院に来院した初診患児の実態を把握し、分析することによって、今後さらに小児歯科専門開業医院としての診療内容を充実させるためにこの調査を実施した。調査した患児は、定期診査の受診状態を把握するためと、診療体制がある程度確立して、来院する患児の傾向も安定してきたと考えられる開院3年経過後の昭和62年6月から昭和63年8月までに来院した初診の男児498名、女児502名、計1,000名について、初診時の問診票および診療用チャートに基づいて検討した。

調査内容は、患児の年齢分布、平均年齢、地理的分布、当院受診の理由、主訴、全身疾患や障害の有無とその内容、咬合および歯列の状態、口腔習癖、歯牙および軟組織の疾患など臨床的にみられる諸症状についての実態を調べた。また治療終了後の定期診査の受診状況についても調査したので、その結果について報告する。